施肥による温州ミカンの隔年結果防止

最近の異常気象等が引き金となって、温州ミカンは隔年結果性が助長され、平均反収も減少傾向にある。隔年結果を防ぐには言うまでもなく、干ばつや寒風害を防ぎ、せん定・摘果で着果を調節し、肥培管理で樹勢の安定を図る等、総合的な技術対策が必要である。

長期間の温州ミカンに対するチッソ施用量試験の結果から施用量と隔年結果性の関係をみると、施肥チッソ量が少ない場合は、隔年結果性が次第に助長され、特に裏年の収量減少が著しくなることがわかる（図１）。これは生態的にみて、新梢の伸びや新葉数が減少することも関与している。（図２、３）。

施肥の面から隔年結果を防止するためには、適期適量の施肥によって毎年充実した新梢を多く発生させ（特に表年）、翌年の結果母枝と葉数を確保することが重要である。

今年、着果負担の大きい園地の秋肥は十分に肥料を施用しておく必要がある。また、樹勢が弱っている園地では、収穫後に２～３回尿素やリン酸を葉面散布し、樹勢の回復と着花量の増加を図る必要がある。

なお、秋肥を十分に施用したところでは、翌年の春肥で新梢が徒長し、着果不良をまねくことがあるので、過度の施用には注意する。

（土壌肥料班：主任研究員　石川　　啓）

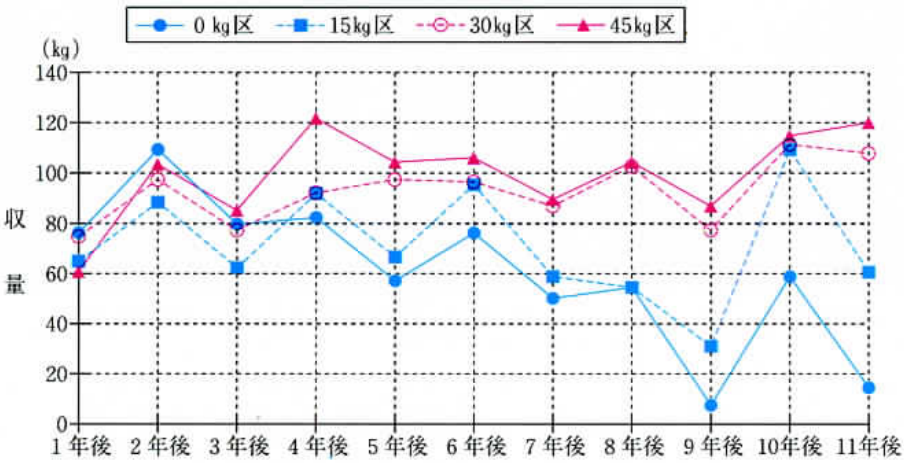

図１　チッソ施用量と収量の年次変化（試験開始後の年数）

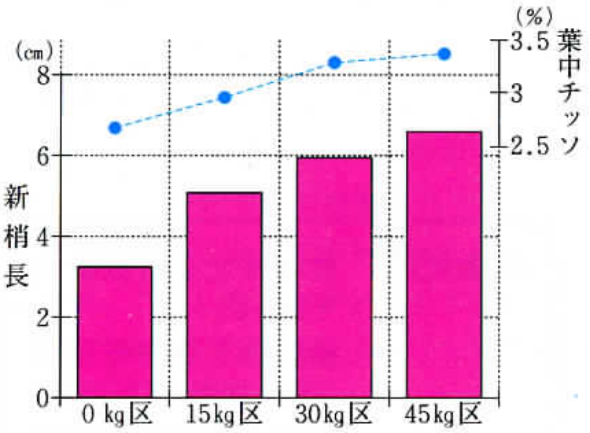

図２　チッソ施用量と新梢長及び葉中チッソ

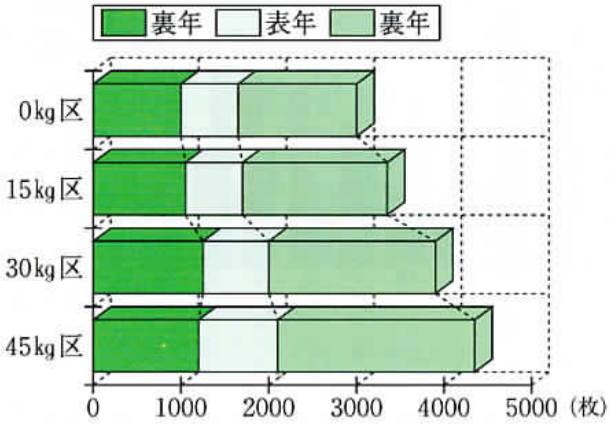

図３　チッソ施用量と新葉数